

形態論的観点からみた現代日本語の「テ補助動詞」

—共通語を例として—

梁井 久江

1. はじめに

現代日本語には、「食べている」の「-テイル」、「読んでおく」の「-テオク」のように、(動詞語幹+)「テ」+補助動詞という形態をとる一連の形式が存在し、従来の研究では、個々の形式について主に意味的な観点からの分析がなされてきた。しかし、これら一連の形式相互の承接関係や前接動詞への従属度の違いといった観点からの分析が十分であるとは言いがたい。さらに、「食べてる」の「-テル」、「読んどく」の「-トク」といった縮約形は、「テ」と補助動詞とが融合しており、「-テイル」、「-テオク」などとは形態論的に異なったふるまいをすることが予想される。

そこで、本稿では、「テ」+補助動詞という形態をとる一連の形式を「テ補助動詞」と呼び、対応する縮約形がある場合にはこれも含めて、形態論的な観点からの考察を行う。以下では、テ補助動詞(縮約形を含む)について、相互承接と前接する動詞への従属度といった観点から一連の形式の相違を明らかにしたいと思う。

なお、「縮約形」の定義については、「現代日本語において、同一と認められる語(句)が異なった複数の音形を持って現れるとき、その音形間の関係において次のいずれかの音声的過程が認められた場合、その認められた方の形を「縮約形」と呼ぶ(齋藤1991, p.92)」とする齋藤(1991)の定義を援用し、縮約する元の形式を「非縮約形」と呼ぶことにする。

表記に関しては、音素表記を用い、促音を/Q/、撥音を/N/で表す。また、単独で現れない語以下の形態素を-, 単独で現れない語を=で表し、「-テイル」における「テ」と「イル」のように間に独立性が認められうる場合#で示す。各例文には、読みやすさを考慮し、漢字仮名まじり表記も添えることとする。

2. 先行研究

現代日本語の動詞複合体¹における各形式間の相互承接の概要については、これまでに多くの研究で言及され(仁田1983, 森山1988, 風間1992他), 基本的には、動詞語幹に、ヴォイス, アスペクト, みとめ方, テンス, モダリティのカテゴリーに属す

¹ 風間(1992)では、動詞語幹にさまざまな接辞(助動詞)や助詞が付いて複合体を作ることから、特に「動詞複合体」と呼んでいる。本稿でも、これを用いることとする。

る形式が承接していくことが明らかになっている。中でも風間(1992)は、動詞複合体を構成する諸形式を分類し、形式相互の順序、機能について詳細な検討を行っており、多くの示唆に富んでいる。しかし、風間(1992)では縮約形が考察の対象から外れており、縮約形も含めたテ補助動詞の体系全体を形態論的観点から把握するには、依然問題が残されている。

次に、前接する動詞への従属度といった観点からは森山(1988)がある。森山(1988)は、動詞に対する形態の従属度の度合いは、テ補助動詞と動詞との間に副助詞を介在させることで調べることができるとし、「調べてはみた(森山 1988, p.35)」のように、テ形の形式と動詞との間に副助詞を介在させることができることから、テ補助動詞は、受身、使役等の派生形式、アスペクトを示すイ補助動詞に比べ、「動詞から独立的であると言える(同, pp.35-36)」と述べている。しかしながら、一口にテ補助動詞が動詞から独立的であると言っても、形式によって従属度が異なる可能性があること、縮約形の動詞への従属度は考慮されていないことから、さらに詳細な調査を行う必要があると考えられる。

3. 調査概要

3.1 調査の範囲

本稿では、上述の風間(1992)による動詞複合体を構成する諸形式の分類²を参考にし、

² 風間(1992)では、表記方法を次のように規定した上で、諸形式の分類を行っている。まず、語が文中での文法的役割を示すために必ずとらなければならない形式を、「屈折形式」とし、[]で示し、それ以外の附属形式を「派生形式」とする。次に、形式間の結びつきの強さの違いに着目して、あいだに何もはさむことができず、前後の要素が常に同じものは、それ以上分けない。単独では現れない形式を、「附属形式」、「附属語」(服部(1971)の定義を援用)とし、前者を-, 後者を=で示す。なお、()によって、その形式がつく動詞の語幹の種類によって異形態をもつことを示す。動詞複合体を構成する諸形式の分類については、次のとおり。(1)派生形式: -(s)asel[-ru] (使役), -(r)are[-ru] (受身), -(rar)el[-ru] (可能), -(i)mas[-u] (丁寧), -(a)na[-i] (否定), -(i)ta[-i] (願望), -gar[-u](2)連用形につづく補助動詞(「イ補助動詞」と呼ぶ)と補助形容詞: #hazime[-ru], #tuduke[-ru], #owar[-u], #kake[-ru], #das[-u], #kir[-u], #tuku[-u]など(以上アスペクト), #yasu[-i], #yo[-i], #niku[-i], #gata[-i]など。(3)テ中止形につづく補助動詞(「テ補助動詞」と呼ぶ)と補助形容詞: #i[-ru], #ar[-u], #ok[-u], #sima[-u], #k[-u], #k[-uru]など(以上アスペクト), #yar[-u], #mora[-u], #kure[-ru]など(以上やりもらい), #hosi[-i](4)連用形につづくソウ+ダ: [-i]=soo[=da] (稼働・推量)(5)屈折形式: [-(x)u], [-i]ta, [-y]oo, [-(u)mai], [-e~ro] (命令), [-(x)una](6)連体形につづく形式名詞+ダ: =no[=da], =yoo[=da], #wake[=da], #mono[=da], #hazu[=da]など。(7)終止形につづくソウ+ダ: [-(x)u]=soo[=da] (伝聞)(8)(4), (6), (7)以外の附属語: =daroo, =rasi[-i](9)終助詞: =zo, =ze, =wa, =ka, =yo, =ne, =na, =sa, =tomo など。(風間 1992:243-244) さらに風間(1992)は、諸形式の承接順序に注目し、屈折形式[-i]taを基準とし、これより前のみ位置しうるものをA類、これより後ろに位置しうるものをB類とし、大きく二つに分類した。この分類基準を用いると、上記の(1)~(4)はA類、(6)~(9)はB類に属する。よって、この分類に従えば、本

テ補助動詞としてまとめられる一連の形式について形態論的観点から網羅的に考察を行った。調査対象としたテ補助動詞は、以下のとおりである³。

非縮約形	テイル	テアル	テオク	テシマウ	テイク	テクル	テミル
縮約形	テル		トク	チャウ	テク		

3.2 調査の方法

本稿では、テ補助動詞（縮約形を含む）をめぐる承接関係に関しては、上に挙げた風間(1992)の相互承接に関する分類法を援用する⁴。以下、4.1において、使役、受身等の派生形式、「ーハジメル」等のイ補助動詞との承接、及びテ補助動詞相互の承接について検討したいと思う。また4.2では、テ補助動詞が、(1)副助詞を介在できるかどうか、(2)否定形式と共起できるかどうか（共起する場合、それが何を否定しているのか）について考察を行い、前接する動詞への従属度に関し、テ補助動詞間の相違がみられるのかどうか明らかにしたいと思う。

なお、諸形式が相互に承接した文、副助詞を介在させた表現等の文法性判断は、基本的には筆者の内省に基づくが、筆者自身が迷った例については、日本語母語話者（約10名）に対し小規模なアンケートを実施し、再度検討した。また、場合によってはインターネットのウェブサイトに現れた例も参考にし、考察を深めた。

4. 調査結果とその考察

4.1 承接関係

本節では、テ補助動詞をめぐる承接関係をみていく。まず、今回考察の対象とするテ補助動詞以外のA類前半部に位置する形式（具体的には、使役、受身、可能を表す派生形式、アスペクトを示すイ補助動詞、やりもらいを示すテ補助動詞）との承接について、簡単に述べる。次に、テ補助動詞同士の相互承接について詳しく検討する。

4.1.1 A類前半部に位置する他の形式との承接

稿で問題にしているテ補助動詞とその縮約形は、A類の、特に前よりに位置する形式であることとなる。

³ テ補助動詞には、やりもらいを示す一連の形式（非縮約形「ーテモラウ」、「ーテクレル」、「ーテヤル」、「ーテアゲル」、縮約形「ータゲル」）も含まれるが、紙幅の都合上、今回は考察の範囲からはずし、今後稿を改めて論じたい。

⁴ 脚注2を参照。ただし、現代日本語の活用に関する筆者の考えは風間(1992)のそれと若干異なるが、本稿ではこれに準ずることとした。

ここでは、アスペクト或いはモダリティ⁵に関わるテ補助動詞と、A類前半部に位置する他の形式の承接について述べる。

まず、ヴォイスを示す派生形式との相互承接についてみてみよう。ヴォイスを示す諸形式とは、相互に承接し、承接順序の交替も可能である。

kak·are·te#i·ru	書かれている	kak·ase·te#ok·u	書かせておく
ka·ite#sima·e·ru	書いてしまえる	ka·itok·ase·ru	書いとさせる

ただし、いくつかのテ補助動詞には、ヴォイスを示す形式との承接に制限がみられる。例えば、「ーテイル」が受身の形式を後接できるのは、この承接が「あいつに見ていられては、うかうか内緒話もできない」のように、複文の従属節中に現れたときだけである。これは、主節の主語と従属節の主語を一貫させるという要請のもとで機能するためである(森山 1988)。受身の形式を後接しない形式にはこの他に「ーテミル」, 「ーテイク」, 「ーテアル」がある⁶。なお、「ーテアル」に関しては、使役、可能を示す形式も、後接することができない。

*ka·ite#ar·ase·ru	書いてあらせる	*ka·ite#ar·are·ru	書いてあられる
*ka·ite#ar·e·ru	書いてあれる		

非縮約形とでは承接が可能であった形式が、対応する縮約形とでは承接が不可能になることがある。例えば、使役及び可能を表す形式は、「ーテル」に後接不可能か、少なくとも「ーテイル」への後接より後接が困難である。

*ka·ite·sase·ru	書いてさせる		
?ka·ite·rare·ru	書いてられる	??ka·ite·re·ru	書いてれる

次に、イ補助動詞との承接についてみてみよう。森山(1988)、風間(1992)等で既に指摘されているように、アスペクトを示すイ補助動詞とテ補助動詞は、イ補助動詞ーテ補助動詞の順に承接する。この順序は固定的で、逆の順序での承接は非常に不自然に感じられる。

⁵ 本稿で用いる「モダリティ」という用語は、「ーダロウ」のような典型的なモダリティ形式のみに使われる場合と異なり、「ーテシマウ」, 「ーテオク」, 「ーテミル」といったテ補助動詞の中に含まれる「モダリティ的意味」を表すために使用することとする。

⁶ 「ーテイク」が受身の形式を後接させないことに関して、森山(1988)は、「受身ということが方向性を指定するという問題(森山 1988, p.33)」であろうとしている。

kak·i#hazime·te#i·ru 書き始めている kak·i#owa·Qte#sima·u 書き終わってしまう
*ka·ite#i·hazime·ru 書いてい始める *ka·ite#sima·i#owar·u 書いてしまい終わる

ただし、「ーチャウ」に関しては、話者による判断の揺れが見られるものの、一部の補助動詞に対して、意味的に矛盾しない限り前接することができるようである。

(例)

(1) そういう状況になったら、エンドレスで食べちゃいだすからだめなんだよね
→?tabe·tya·i#das·u⁷

(2) あの頃の思い出、忘れちゃいかけてるけど…
→?wasure·tya·i#kake·te·ru⁸ (以上、ウェブサイト)

さらに、やりもらいのテ補助動詞の場合、ヴォイスを示す形式の場合と同様、アスペクト或いはモダリティに関わるテ補助動詞と基本的には相互に承接し、順序の交替も可能である。しかし、「ーテアル」に関しては、これらの形式を後接することができない。

ka·ite#ya·Qte#sima·u 書いてやってしまう
ka·ite#sima·Qte#yar·u 書いてしまっやる
ka·ito·ite#mora·u 書いといてもらう
*ka·ite#a·Qte#ager·u 書いてあってあげる

ただし、やりもらいのテ補助動詞は、恩恵とその方向性を示す形式であることから、テ補助動詞の表す意味・用法によっては、共起が不自然になることがある。例えば、「ーテシマウ」の意味が、動作の完結ではなく、動作主の動作が話し手にとって不利益を与えることを表す場合、話し手が動作主の行う動作によって恩恵を受けることを表す「ーテモラウ」の恩恵の方向と矛盾し、承接が困難になることがある。

(例)

(3)a. (A さんに残り物を全部) ??食べてもらってしまった
b. 食べてしまっもらった

(3a)の「ーテシマウ」は、動作主の動作が話し手にとって不利益を与えることを表すが、動作主の行う動作によって話し手が恩恵を受けることを表す「ーテモラウ」と、

⁷ アンケートによって、日本語母語話者 10 名の内省を調べたところ、「言える」と答えた人は 0 名であったが、「言えそうだ」と答えた人は 6 名に上った。

⁸ アンケートによって、日本語母語話者 10 名の内省を調べると、「言える」、「言えそうだ」と答えた人は、それぞれ 3 名ずつ、合計 6 名であった。

恩恵の方向性の点で矛盾し、日本語として不自然に感じられる⁹。一方(3b)が表すのは、動作主が「残り物を全部食べる」という動作を話し手のために完結させたという状況であり、「一テシマウ」は話し手に対する不利益性を表さないため、「一テモラウ」と相互に承接することができると考えられる。このような、恩恵の方向性の矛盾による承接の制限は、動作主の動作が話し手に対し恩恵を与えることを表す「一テクレル」の場合にもみられる。「一テクレル」を「一テシマウ」に前接させると、意味的な不整合から文全体が不自然になる¹⁰。

??tabe-te#kure-te#sima-u 食べてくれてしまう¹¹

同じやりもらいのテ補助動詞でも、「一テヤル」の場合、話し手と動作主が一致し、話し手の動作が聞き手に対し恩恵を与えることを表すため、「一テシマウ」に前接する場合も意味的な不整合が起きず、自然な文となる。

tabe-te#ya-Qte#sima-u 食べてやってしまう

注目すべきは、「一テシマウ」の縮約形「一チャウ」が、「一テシマウ」では前接が困難であった「一テモラウ」、「一テクレル」を容易に前接するという点である。

tabe-te#mora-Qtya-Qta 食べてもらっちゃった
tabe-te#kure-tya-Qta 食べてくれちゃった

「食べてもらっちゃった」、「食べてくれちゃった」が表す状況について考えると、「(動作主に) 残り物を食べてもらってラッキーだった」、「(動作主が) 自分のために残り物を食べてくれてありがたい」と話し手が感じていることが表されている。「一テシマウ」を用いた「食べてもらってしまった」、「食べてくれてしまった」では、「一テシマウ」のもつ話し手の不利益性のために、「一テモラウ」、「一テクレル」と整合せず、日本語として不自然であったのに対し、ここでの「一チャウ」は、むしろ話し手にとって喜ばしい出来事が成立したという正の感情評価的意味を表しており、このためこれらの

⁹ ただし、「食べてもらって悪いなあ、申し訳ないなあ」という、動作主に対する「謝罪」の気持ちを表す文脈では、この文は日本語として自然である。

¹⁰ 同様の指摘に、庵他(2000)がある。庵他(2000)では、『てしまう』は、話し手の意志や判断を表す形式ですので、話し手が主語にならない『くれる』は『くれよう』や『くれてしまった』の形を持ちません(庵他 2000, p.108)と述べてある。

¹¹ もちろん、相手を皮肉って「(食べないでいてほしかったのに、)全部食べてくれてしまっって…」などと言うことは可能であるが、この場合の「一てくれる」は、臨時的に使用されているにすぎない。

形式とも整合し、後接が可能になっていると考えられる。この、「-テシマウ」と「-チャウ」とが他形式との承接のあり方において異なるという事実は、非縮約形と縮約形という関係にある両形式が、意味・用法上異なっていることを端的に示すものである。このように、非縮約形と縮約形とは、形態面で異なるだけでなく、意味的、統語的な面でも異なる可能性があり、両者の相違を検討することは、研究課題として今後大きな意味をもつと思われる。

4.1.2 テ補助動詞同士の承接

次に、アスペクト或いはモダリティに関わるテ補助動詞同士の承接関係について検討してみよう。[1]は、テ補助動詞同士の相互承接について、どのような承接が成り立ちうるのかを調べたものである。承接する場合は○、しない場合は*、承接するかどうか判断に迷う場合は、?で表す。

[1] アスペクトを示すテ補助動詞同士の承接関係（縦列が前接）

		非縮約形						縮約形				
		-te# i-ru	-te# ar-u	-te# ok- u	-te# sim a-u	-te# mi-r u	-te# ik-u	-te# k-ur u	-te- ru	-tok -u	-tya -u	-tek -u
非縮約形	-te#i-ru	*	*	*	○	*	*	*	*	*	○	*
	-te#ar-u	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	-te#ok-u	○	○	*	○	○	*	*	○	*	○	*
	-te#sima-u	○	○	○	?	○	○	○	○	?	?	?
	-te#mi-ru	○	?	○	○	?	*	*	○	○	○	*
	-te#ik-u	○	*	○	○	○	*	*	○	?	○	*
	-te#k-uru	○	○	○	○	○	*	*	○	○	○	*
縮約形	-te-ru	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*	*
	-tok-u	?	○	*	○	○	*	*	○	*	○	*
	-tya-u	○	○	○	○	○	○	○	○	○	?	○
	-tek-u	○	*	○	○	○	*	*	○	*	○	*

[1]をもとに、テ補助動詞相互の承接の特徴的な点について述べていく。まず、「-テイル」、「-テール」、「-テアル」は、基本的には他のテ補助動詞に前接しない。これは、これらの形式が接続すると動詞複合体全体が状態化するためで、ゆえに「-テオク」等の非状態的な形式は後接できないと考えられる。

*ka-ite#i-te#ok-u 書いていておく *ka-ite#i-te#ar-u 書いていてある
 *ka-ite#a-Qte#mi-ru 書いてあってみる *ka-ite#a-Qte#k-uru 書いてあってくる
 *ka-ite-tok-u 書いてとく

ただし「-テイル」は、「-テシマウ」、「-チャウ」の意味・用法によっては、これらに前接する場合がある。

(例)

(4)今回は7階の部屋がすべて使われてしまったので、先生の個人研究室でゼミを行ないました。(ウェブサイト)

(4)が表すのは、他の人に7階の部屋を全て使われていて困ったという状況である。この場合の「-テシマウ」は、「困る」などの話し手の負の感情を表しており、「ある動作・出来事が完結する」という、非状態的な意味では用いられていない。このため、「-テイル」を前接することが可能になっているものと思われる。このように、「-テイル」は「-テシマウ」、「-チャウ」に前接しうる。しかしながら、縮約形「-テル」ではほとんど不可能である。

*ka-ite-te#sima-u 書いててしまう *ka-ite-tya-u 書いてちゃう

「-テル」が「-テシマウ」、「-チャウ」を含む、取り上げた全てのテ補助動詞に前接しないのは、諸形式を後接する際、テ補助動詞の語幹を構成する要素が見かけ上なくなるという形態的な制限によると考えられる。前述した使役、可能を示す形式の前接を許さないのも、同じ理由によるものであろう。

話を戻し、再度[1]に目を転じよう。ここで注目したいのは、「-テシマウ」、「-チャウ」が、非縮約形と縮約形という関係でありながら、相互に承接するという事実である。次に示すのは、インターネットのウェブサイトからの用例である。

(例)

(5)かなりシンプルに仕上げたので物足りなさ感じちやってしまうけど、これがあたしの仕上げたかったホームページ。

(6)おまけに写真まで撮られちやってしまうしさ。

(7)楽しい事を書いているほうが、自分でも好きです。読む人に引かれてしまちやうような事書くと、自己嫌悪がつのるだけです。(以上、ウェブサイト)

なお、「-テシマウ」と「-チャウ」が相互に承接する場合、「-チャツテシマウ」のように、「-チャウ」に「-テシマウ」が後接する例が目立つ。インターネットの検

検索エンジン Google を用い用例数を数えてみると¹²、「-チャッテシマウ」の承接例が 142 例と圧倒的に多く、その逆の「-テシマツチャウ」は 17 例と、前者ほど多くは見られない。また、「-テシマウ」と「-テシマウ」, 「-チャウ」と「-チャウ」が承接する用例数は、それぞれ 25 例, 1 例で、「-チャッテシマウ」の数には遠く及ばなかった¹³。

4.1.3 承接関係のまとめ

以上、本節では、テ補助動詞をめぐる承接関係に関し、特に、A 類前半部に位置する諸形式及び、テ補助動詞同士の相互承接を取り上げ、検討してきた。本節での考察を整理すると、次のようになる。

[2] 承接関係からみたテ補助動詞

(1) ヴォイスを示す諸形式とテ補助動詞とは、「-テアル」を除き、相互に承接し、承接順序の交替も可能である。しかし、「-テイル」, 「-テミル」, 「-テイク」には、受身の形式を後接しないという制限がある。

(2) アスペクトを示すイ補助動詞との相互承接は、基本的にはイ補助動詞-テ補助動詞の順に承接する。この順序は固定的であり、逆の順序の承接は非常に不自然である。ただし、「-チャウ」に関しては、意味的に矛盾しない一部の補助動詞に対して前接することができる。

(3) やりもらいのテ補助動詞とは、基本的には相互に承接し、順序の交替も可能である。しかし、これらが恩恵とその方向性を示すことから、テ補助動詞の表す意味・用法によっては、共起困難になる場合がある。

(4) テ補助動詞同士の承接では、「-テイル」, 「-テル」, 「-テアル」は、基本的には他のテ補助動詞に前接しない。ただし「-テイル」は、「-テシマウ」, 「-チャウ」の意味・用法によっては、これに前接する場合がある。

(5) 「-テル」は、その形態的な制限により、A 類前半部に位置する多くの形式に前

¹² ここで挙げた用例数は、「-ちゃってしまふ」, 「-てしまつちやう」という形をとるものに限る（検索の際の文字列は、「ちゃってしまふ」, 「じゃってしまふ」, 「てしまつちやう」, 「でしまつちやう」に指定した）。「-ちゃってしまつて」等、形態変化したものも含めると、「-チャウ」が上接する例は約 1000 例, 「-テシマウ」が上接する例は約 70 例で、やはり「-チャウ」+「-テシマウ」という順序をとる場合が圧倒的である。このように、縮約形「-チャウ」が「-テシマウ」と承接するという事実は、「-チャウ」が「-テシマウ」とは異なる意味・用法を確立しつつあることを示唆している。これについては、稿を改めて論じたいと思う。

¹³ アンケートを用い、日本語母語話者 10 名の「-テシマウ」と「-チャウ」の承接順に関する内省を調べたところ、「言える」或いは「言えそうだ」と答えた人の合計は、「-チャッテシマウ」(5/10 名), 「-テシマツチャウ」, 「-チャツチャウ」, 「-テシマツテシマウ」(1/10 名)であった。

接できない。

(6) 「-テシマウ」と「-チャウ」とは、相互の承接が可能である。この場合、「-チャツテシマウ」のように承接順序も固定しつつある。

(7) 「-テイル」と「-テル」, 「-テシマウ」と「-チャウ」のように、非縮約形と縮約形とが、他の形式との承接の仕方で異なる場合がある。

4.2 動詞への従属度

前節では、テ補助動詞をめぐる承接関係について検討した。既に述べたように、テ補助動詞の非縮約形では、「語幹+ *-te#sima+* *-u*(-テシマウ)」のように、「テ」と本動詞とが形の上では依然として保たれている一方、縮約形では、「語幹+ *-tya+* *-u*(-チャウ)」のように、もはや本動詞は保たれておらず、対応する非縮約形に比べ、前接する動詞との結びつきが強いことが予想される。

そこで本節では、テ補助動詞の、前接する動詞への従属度がどの程度であり、非縮約形と縮約形の間に従属度の差がみられるのかについて、明らかにすることを目的とする。具体的には、(1)副助詞が介在できるかどうか、(2)否定形式と共起できるかどうか、共起する場合、それが何の否定を意味するのかについて考察を行う。

4.2.1 副助詞の介在性

まず、副助詞の介在性について考えてみよう。第2章で触れたように、副助詞の介在性から動詞に対する形式の従属度の度合いを検討した森山(1988)は、テ補助動詞の前接する動詞への従属度について、「調べてはみた(森山 1988, p.35)」のように、「テ」と本動詞との間には副助詞を介在させることができることから、テ補助動詞は、受身、使役等の派生形式、アスペクトを示すイ補助動詞に比べ、「動詞から独立的であると言える(同, pp.35-36)」と述べている。しかしながら、一口にテ補助動詞が動詞から独立的であると言っても、形式によって従属度が異なる可能性があること、「-チャウ」のような縮約形の動詞への従属度は考慮されていないことから、動詞への従属度の形式ごとの相違に関し、さらに追求する必要がある。そこで、次に示す2つのテストを実施し、それぞれの形式に対する副助詞の介在性について検討した。

[3] 副助詞の介在性テスト

テスト(1)テ補助動詞を構成する、テと本動詞の間に、副助詞「ハ」を挿入する
(例) 調べて は いる

テスト(2)テ補助動詞の付いた動詞複合体の連用形転成名詞+副助詞「ハ」+動詞「スル」という表現が成立するか否かを調べる

(例) 調べてい は する

[3]に示したテスト(1)において、副助詞「ハ」を挿入できるということは、「ハ」の前後で切ることができる、つまり「ハ」の前の部分と後の部分が独立的であるということの意味する。また、(2)において、作られた形が成立するならば、「ハ」の前の部分、つまり連用形転成名詞の部分の結びつきが強く、転成名詞化させていない元の形式が前接する動詞に対し従属していることを意味する。[4]に、上記の2つのテストの実施結果を示した。「ハ」を挿入した文が成立する場合を○、一般的ではないが成立する場合を?、成立しづらい場合を??、成立しない場合を*で表す。なお、テと動詞が融合している縮約形の場合、テスト(1)では、形自体が作れないため、-で記し、比較の対象としなかった。

[4] 副助詞「ハ」の介在性

		(1) Vte =wa=X ⁱ	(2) Vte#Y ⁱⁱ =wa=su·ru
非縮約形	-te#i·ru	○	○
	-te#ok·u	○	○
	-te#mi·ru	○	○
	-te#ar·u	?	○
	-te#k·uru	?	○
	-te#ik·u	??	○
	-te#sima·u	??	○
縮約形	-tok·u	-	○
	-tya·u	-	○
	-tek·u	-	*
	-te·ru	-	*

i) 動詞部分を X で表す。

ii) 動詞部分を連用形転成名詞化させたものを Y で表す。

まず、テスト(1)の結果をみてみよう。上に挙げたテ補助動詞のうち、「-テイル」、「-テオク」、「-テミル」は、「書いてはいる」、「書いてはおく」、「書いてはみる」のように、「ハ」を介在させることができるが、「-テアル」、「-テクル」、「-テイク」¹⁴、「-テシマウ」に関しては「ハ」を介在させるのが困難である。特に、「-テシマウ」に「ハ」を介在させようとする

¹⁴ 「走っては行かないけど、なるべく急いで行くよ」のように、「行く」が本動詞として用いられている場合は除く。

??ka-ite=wa=sima-u

書いてはしまう

??sirabe-te=wa=sima-Qta=yo

調べてはしまったよ

となり、非常に不自然な例となってしまう。このことは、「-テシマウ」が、アスペクトを示すテ補助動詞の中でも、テと動詞の結びつきが強いこと、つまり、動詞「シマウ」自体の独立性が高くないことを意味する。

次に、テスト(2)の結果をみてみよう。[4]に示したとおり、調査したテ補助動詞は全て「書いてしまいはする」のように連用形転成名詞化でき、縮約形「-トク」、「-チャウ」についても、「読んじゃいはした(けど、まだ意味がつかめてない)」のように連用形転成名詞化できた。このことは、これらの形式が前接する動詞に対し一様に従属的であること意味する。一方、縮約形「-テル」、「-テク」は、「*読んではした」、「*読んできはした」となり、連用形転成名詞化できない¹⁵。このことから、これら2つの形式は、他の縮約形に比べ、前接する動詞への従属度が高いと考えられる。また、「-テク」の連用形転成名詞化ができないのは、「-テクル」の連用形転成名詞と同音衝突することとも関係があると思われる。

テスト(1)(2)の結果より、副助詞の介在性からテ補助動詞の動詞への従属度をみると、[5]のようになる。調査したテ補助動詞のなかでは、動詞への従属度が高いのは「-テイク」、「-テシマウ」、低いのは「-テイル」であるといえる。

[5] 副助詞の介在性からみた前接する動詞への従属度

		非縮約形				
従属度	高い	·te#ik·u	·te#ar·u	·te#ok·u	·te#i·ru	低い
		·te#sima·u	·te#k·uru	·te#mi·ru		
		縮約形				
従属度	高い	·tok·u		·tek·u		低い
		·tva·u		·te·ru		

4.2.2 否定形式との共起

次に、否定形式との共起について、観察してみよう。動詞への従属の度合いを考えるにあたり、ここで否定形式との共起を観察するのは、先行研究における次のような指摘による。

¹⁵ 「-テル」は、テスト(2)においても形が作れないが、この形式の場合、連用形転成名詞化すると、動詞語幹+「テ」と形の上で同じになり、補助動詞としての形を保てなくなる。よってテスト(2)では「-テル」の従属度を正確に測ることはできないかもしれない。詳細は今後の課題としたい。

寺村(1979)は、日本語において、「否定は用言の付属語の形で現れるから、用言(補助的なものも含めて)が一文中にいくつも出てくれば、理論的、形式的には、そのどれにでも付属して現れる可能性がある(寺村 1979, p.210)」が、「実際には、おそらく先行する用言との密着度の強さから、先行の用言と自らとの間に否定辞が介入できないような補助用言は多い(同)」と述べ、「-テイル」、「-テアル」、「-テアゲル」、「-テクレル」の4つのテ補助動詞を取り上げ、それ自体の否定及び、「～シテに対応する～シナイデという形にも付く(言い換えれば内側の否定化を許す)(同)かどうかについて検討している。また風間(1992)では、動詞複合体の否定について、「否定の位置が無理なものや、その位置では意味の形式化が起こらないものがある(p.259)」とし、例として、「??kak·ana[-ide]#ar[-u] (書かないである)」、「??kak·ana[-ide]#sima[-u] (書かないでしまう)」を挙げている。

以上の指摘から、前接する動詞への従属度は、寺村(1979)が言うところの「内側の否定化」を許すか否か、許すとすれば、テ補助動詞自体の否定とどのような点で異なるのかということである程度測ることが可能であり、「内側の否定化」が可能である形式ほど、前接する動詞に対する従属度が低いことが予想される。そこでここでは、テ補助動詞が、(1)それぞれ否定の形をつくるか、(2)「内側の否定化」は許すか、(3)許すとすれば、それは(1)との間に違いがあるのかについて調査した。調査の結果を[6]に示しておく。(1)、(2)は否定と共起する場合の形を示すが、日本語の共通語として容認できない形に*、容認しづらい形に??、一般的ではないが容認できる形に?を付す。また、無印は問題なく容認できる形である。(3)では、(2)が用法上(1)と同じ特徴を有する場合は○、異なる場合は×で表す。なお、(1)と(2)が比較できない場合、·を付しておく。

[6] 否定形式との共起

		(1)テ補助動詞自体の否定 (テ補助動詞+否定)	(2)内側の否定 (否定+テ補助動詞)	(3) (2)は(1)と用法上 同じか?
非 縮 約 形	·te#ok·u	·te#oka·ana·i	·(a)na·ide#ok·u	○
	·te#i·ru	·te#i·na·i	·(a)na·ide#i·ru	×(副詞的成分+動詞)
	·te#ik·u	·te#ik·ana·i	·(a)na·ide#ik·u	×(副詞的成分+動詞)
	·te#k·uru	·te#k·ona·i	·(a)na·ide#k·uru	×(副詞的成分+動詞)
	·te#sima·u	·te#simaw·ana·i	??·(a)na·ide#sima·u	×(副詞的成分+動詞)
	·te#mi·ru	·te#mi·na·i	*·(a)na·ide#mi·ru	·
	·te#ar·u	·te#i·na·i (*·te#ar·ana·i)	*·(a)na·ide#i·ru (*·(a)na·ide#a·ru)	·
	·tok·u	·tok·ana·i	?·(a)na·i·dok·u	○

縮	-tek-u	-tek-ana-i	?(a)na-i-dek-u	×(副詞的成分+本動詞)
約	-te-ru	-te-na-i	??(a)na-i-de-ru	×(副詞的成分+本動詞)
形	-tya-u	-tyw-ana-i	*(a)na-i-zya-u	-

まず、テ補助動詞それ自体の否定であるが、当然のことながら、調査したテ補助動詞全てにおいて、否定形式と共起することができた¹⁶。これに対し、「内側の否定化」を許すかどうかについては、取り上げた形式によって差がみられた。非縮約形の場合と縮約形の場合を分けて考えると、非縮約形では、「-テオク」、「-テイル」、「-テイク」、「-テクル」は「内側の否定化」を許したが、「-テシマウ」はこれを許しにくく、「-テミル」、「-テアル」に至っては全く許さないようである。

kak-ana-ide#ok-u 書かないでおく kak-ana-ide#i-ru 書かないでいる
kak-ana-ide#ik-u 書かないでいく ??kak-ana-ide#sima-u 書かないでしまう
*kak-ana-ide#mi-ru 書かないでみる *kak-ana-ide#a-ru 書かないである

「-テシマウ」の「内側の否定化」である「-ナイデシマウ」は、現代共通語の話しことばにおいては非常に不自然である。ただし、かつては自然に用いられていたようで、山口(2001)によれば、「-ズニシマフ」が、江戸期の作品である『浮世床』、『春色梅児誉美』、夏目漱石の『こころ』(大正3年)に、「-ナイデシマフ」が、谷崎潤一郎の『細雪』(昭和18年)に登場している。したがって、形に関する限り、「-ナイデシマウ」という「内側の否定化」が完全に許されないとは言い切れないことになる。とはいえ、「-ナイデシマウ」、「-ズニシマウ」は、「～しないでおわる」という意味を表し¹⁷、動詞「シマウ(=おわりにする)」と同様の用法上の制限をもつことから、副詞的成分「-ナイデ」/「-ズニ」+「シマウ」に分かれると考えられる。このように、「-ナイデシマウ」、「-ズニシマウ」は副詞的成分+動詞であって、文法化した「-テシマウ」自体の「内側の否定化」は不可能である。同様のことは、「内側の否定化」を許すとした「-テイク」、「-テクル」についてもいえる。この2つの形式は、「食べないでいく」、「食べないできた」のように形の上では「内側の否定化」が可能である。しかしこれは副詞的成分+「イク」/「クル」と分析される場合のみ可能であ

¹⁶ ただし、「-テアル」の否定は、「-テイナイ」(te#i-na-i)であり、「-テイル」の否定と中和する。

¹⁷ なお、井上・鍵水(2002)によると、「-ナイデシマツク」は、「東京以西では非文法的な表現(井上・鍵水2002, p.163)」であるが、『～なかった、～ずじまいだった』、『(昨日は)～ないで終わった』などの文脈で；東北、北関東の気づかない方言(同)として用いられている。

って、方向性やアスペクトを示すテ補助動詞として使われている場合、「内側の否定化」は不可能である。

doNdoN aki=ga hukama-Qte#ik·u 深まっていく
 *hukamar·ana·ide#ik·u 深まらないでいく

次に、縮約形「-テル」, 「-トク」, 「-チャウ」, 「-テク」について、「内側の否定化」が可能かどうか調べてみると、いずれの形式も、非縮約形より「内側の否定化」を許しにくい。なかでも「-チャウ」の「内側の否定化」は、日本語母語話者にとって全く容認できない形である。

?yom·ana·i·dok·u 読まないどく ?yom·ana·i·dek·u 読まないでく
 ??yom·ana·i·de·ru 読まないでる *yom·ana·i·zya·u 読まないじゃう

「-テク」, 「-テル」は、「-チャウ」と比べ「内側の否定化」を許しやすいが、これが可能なのは、非縮約形「-テイク」, 「-テイル」と同様、副詞的成分+動詞「イク」/「クル」と分析できる場合のみであるため、テ補助動詞自体の「内側の否定化」とは認められない。したがって、これらの形式は、「内側の否定化」を完全に許す「-トク」に比べ、前接する動詞への従属度が高いと考えられる。このことを、まとめると、次の[7]のようになる。動詞への従属度が比較的高いのは、非縮約形では「-テアル」, 「-テミル」, 縮約形では、「-チャウ」である。また、非縮約形と縮約形を比較した場合、後者の方が全般的に「内側の否定化」が困難であることから、前接する動詞に対しより従属的であるとされる。

[7] 否定との共起からみたテ補助動詞の従属度

		非縮約形				
従属度	高い	·te#ar·u	·te#sima·u	·te#i·ru	·te#ok·u	低い
		·te#mi·ru		·te#ik·u	·te#k·uru	
		縮約形				
従属度	高い	·tya·u	·te·ru	·tek·u	·tok·u	低い
	低い	縮約形		非縮約形		

4.2.3 動詞への従属度のまとめ

以上、テ補助動詞とその縮約形の、前接する動詞への従属度について、(1)副助詞の介在性、(2)否定形式との共起という観点から考察した。(1)、(2)の結果を総合し、これらの形式を動詞に対する従属度順に並べ替えると次のようになる。

[8] 動詞への従属度のまとめ

		非縮約形				
従属度	高い	-te#ar-u	-te#k-uru	-te#ok-u	低い	
		-te#sima-u	-te#ik-u	-te#i-ru		
		縮約形				
従属度	高い	-tya-u	-te-ru (?)-tok-u	-tek-u	低い	

(1)非縮約形同士で比較した場合、「-テアル」、「テシマウ」は従属的であり、「-テオク」、「-テイル」は前接動詞から独立的である。「-テクル」、「-テミル」、「-テイク」は、上に挙げた形式の中間に位置づけられる。

(2)縮約形同士で比較した場合、前接動詞に対し最も従属的なのは「-チャウ」、最も独立的なのは「-テク」であり、「-テル」はその中間に位置づけられる。

(3)ただし、中間に位置づけた「-テミル」、「-テイク」、「-トク」は、(1)と(2)の結果にずれがみられるため、基準となるテストを増やし検討し直す必要がある。

(4)非縮約形と縮約形の前接する動詞への従属度を比較した場合、後者の方が全般的に「内側の否定化」が困難であることから、前接する動詞に対しより従属的である。

5. おわりに

本稿では、テ補助動詞を構成する一連の形式について形態論的な観点から考察を行った。そのなかで、「テ」+補助動詞という共通した形態をとる一連の形式が、相互承接及び前接する動詞への従属度といった点で互いに異なる特徴を有すること、さらに「-テイル」と「-テル」のように、非縮約形と縮約形という対応関係にある2つの形式が、他の形式との承接の仕方異なる場合があること、またそれが形式自体の意味的特徴の相違を反映している可能性があることを明らかにした。

テ補助動詞相互の違いについては、従来意味的観点から考察した研究が大半を占めていた。しかし、個々の形式の文法的位置づけを行う際、テ補助動詞の体系全体においてその形態的特徴を把握することを疎かにしたままでは、考察として十分とはいえ

ないのではないだろうか。本稿は、こうした問題に対する筆者なりの試みの一つでもあるのである。

しかしながら、今回の調査では、やりもらいのテ補助動詞や「一テモイイ」等の複合モダリティ形式など、「テ」を含む他の形式については検討が及ばなかった。また、関西の「一トク」、「一テル」、「一テマウ」といった、諸方言におけるテ補助動詞相当形式が、意味的な面だけでなく、形態的な面でも共通語のテ補助動詞と異なる可能性があり、共通語の形式と対照しながらその形態的特徴を検討する必要がある。いずれも今後の課題としたい。

引用文献

- 服部四郎(1971)「附属語と附属形式」『言語学の方法』 岩波書店
井上史雄・鏈水兼貴(2002)『辞典<新しい日本語>』 東洋書林
庵功雄・高梨信乃・中西久実子・山田敏弘(2000)『初級を教える人のための日本語文法ハンドブック』 スリーエーネットワーク
風間伸次郎(1992)「接尾型言語の動詞複合体について：日本語を中心として」宮岡伯人(編)『北の言語：類型と歴史』 三省堂
森山卓郎(1988)『日本語動詞述語文の研究』 明治書院
仁田義雄(1983)「アスペクトの分析・記述に向けて」『国語学研究』23
齋藤純男(1991)「現代日本語における縮約形の定義と分類」『東北大学日本語教育研究論集』6
寺村秀夫(1979)「ムードの形式と否定」林栄一教授還暦記念論文集刊行委員会(編)『英語と日本語と 林栄一教授還暦記念論文集』 くろしお出版
山口堯二(2001)「完了表現史にかかわる補助動詞の推移」『京都語文』7

付記

本稿は2003年1月、東京都立大学に修士論文として提出したものの一部を書き改めたものである。本稿をまとめるにあたり、多くの方に貴重なご指摘をいただいた。この場をかりてお礼申し上げます。

(やない ひさえ・東京都立大学大学院生)